

信州大学医学部の宝

田中直樹

2021年1月1日をもちまして、医学部国際交流担当教授を拝命いたしました田中でございます。国際交流担当教授は、教室横断的に医学部の国際交流全体に関わらせて頂く、新設のポジションです。初代ということで責任の重さを痛感しております。先輩方が築いてこられた国際交流の礎をさらに発展させるよう、努力していく所存です。ご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

信州大学医学部の『基本理念』には、「医科学の教育・研究と医療活動を発展させることによって地域貢献を果たし、国際交流に寄与します」とあります。また『目標』として、「優れた研究成果を広く世界に発信し、諸外国の研究者との研究協力を推進する」「諸外国からの学生・研究者の積極的な受け入れや諸外国への留学を奨励することにより、お互いの顔の見える人的交流を推し進める」と明記されています。本学部のみならず、信州大学医学部に関心を持つ海外の学生・研究者に対しても教育・研究支援を行い、心のこもった交流を通じて信州大学医学部のグローバル化を推進することが私の使命と考えております。

私は長野市の出身で、1995年に信州大学を卒業後、内科三科ローテーションを経て第二内科に入局しました。大学院は代謝制御学教室の青山俊文教授にご指導頂き、HCV コア蛋白トランスジェニックマウスの脂肪肝・肝発癌機構の解明に取り組みました。この研究をきっかけに、非アルコール性脂肪肝炎（NASH）の臨床、肥満や脂質・糖代謝と肝臓病、PPAR α の機能解析へと足を踏み入れていきました。一方、長野県や信州大学以外の環境を知らない私は、海外で研究者・医師としての視野を広げたいと考えるようになりました。留学の条件が整い、2009年10月から5年間、NIHのLaboratory of Metabolismに留学しました。

NIHで過ごした5年間では、遺伝子改変動物を用いてNASH・肥満の研究を進展させ、当時最先端技術であったメタボロミクスを用いた病態解析を一から学ぶことができました。ラボの研究者は私以外 non-MD で、中国、韓国、インドからも来ており、文化やキャリアの多様性、自由な発想や寛容さに驚きました。アメリカでの生活は私や家族にとって苦労も多かったのですが、現地で長く過ごさないと絶対に味わえない、かけがえのない経験ばかりでした。なかでも印象的なイベントの一つに、メリーランド州では毎年4月に“Take Your Child to Work Day”という日があり、小中学生が親の職場を訪問できます（学校は公欠）。NIHでは子供達がグループに分かれてオペ室を見学したり、玉葱からDNAを抽出したりと好奇心をかきたてるようなプログラムが多数用意されており、幼少時より楽しく医学・生命研究に触れさせるプログラムに感心しました。アメリカという雄大で懐の深い国、そこに暮らす様々な人々と接したこと、そして医師以外の研究者仲間を得られたことで、自分の内面や生き方も大きく変化したように思います。そして信州大学医学部の学生には若くて柔軟な時に海外留学を経験し、多彩な文化に触れてほしいと考

えるようになりました。

2014年に帰国後、代謝制御学教室で大学院生（主に河北医科大学からの留学生）を指導しながら、国際交流推進室副室長として学生派遣や受け入れ、研究交流に取り組んできました。信州大学医学部の海外協定校は2015年から5校増え、ドイツのドレスデン工科大学（TUD）、イタリアのトリエステ大学、台湾の高雄医学大学などが新たに加わりました。初めてTUDから信州大学に留学した学生は代謝制御学教室で6か月過ごしましたが、帰国後に信州大学の良さを広く伝えてくれて、TUDの後輩が信州大学への留学を希望するという、好循環が生まれつつあります。さらに交流実績の長い河北医科大学とは、2019年に信大サテライトオフィス・中日医学教育研究センターを河北医科大学内に開所するなど、新たなステージを迎えています。多くの先生方に御支援を頂きつつ、国際交流を活性化させる土壌が整ってまいりました。

COVID-19のパンデミックは国際交流にも甚大な影響を与えましたが、ピンチは新たな活路を見出す絶好のチャンスでもあります。人的往来が停止した代わりに、国際交流セミナーと称して、タイのマヒドン大学やイタリアのトリエステ大学との学生共修、台湾の高雄医学大学との研究発表会、カリフォルニア大学 Davis 校の教授による講義をオンラインで開催しています。また留学体験報告、留学中の医師による現地報告（バーチャル留学）を通して、信州大学にいながらにして世界最先端の医学に触れ、海外協定校との交流や留学への関心を絶やさない工夫を試みています。このような取り組みにより、アフターコロナ時代での留学希望者の増加を期待しております。

国際交流は様々な機関との連携が必須です。信州大学のグローバル化推進センターや他学部と緊密に情報交換を行っており、医学部にも活かせることを学んでいます。長野県内の大学、県や市などの自治体、友好協会、大使館などもコンタクトを取り、協働していきたいと思えます。

昨年末、初めて「海外留学の勧め」という講義をさせて頂きました。昨年はHCVを発見されたNIHのAlter先生がノーベル賞を受賞されたこともあり、Alter先生とNIHで共同研究された清澤研道先生にお話し頂きました。学生は興味を持って講義を聴き、終了後に拍手が起きました。あの時の学生のキラキラした目は強く印象に残っています。国際交流や留学の魅力をいかに学生に伝えていくか、が当面の課題です。また私の学生の頃に比べ、医学部卒業後のキャリアや考え方は多様化しています。21世紀は個別化の時代と言われています。将来海外で活躍したいという学生には、早いうちから知己の留学生や研究者を紹介し、丁寧に対応していきたいと思えます。

信州大学に入学した学生は高度な学力と無限の可能性を兼ねそろえています。学生こそが信州大学医学部の宝であり、グローバルに活躍できる次世代人材を育てることが重要です。しかしコロナ禍の影響で、我々の視線は内向きになりがちなのではないでしょうか。私は国際交流を通して、信州から世界に羽ばたく医師・研究者を一人でも多く輩出し、信州大学医学部の発展に貢献したいと考えております。若輩者ですが暖かく見守って頂き、ご支援・ご意見など何でもお寄せください（naopi@shinshu-u.ac.jp）。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

（信州大学医学部国際交流担当教授）